



道徳性と共感性懐妊

道徳性は、平たく言えば、「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」だと思います。人間は「人間(じんかん)」というように人と人の中でしか生きていけません。子供たちがよりよく生きるために、学校では道徳教育が行われていますし、家庭でも教えるべきことの一つです。例えば、順番を守って並ぶというルールは、みんなが気持ちよく過ごすために必要なものですが、自然にできるものではありません。小さい子供は、ルールを守れず割り込みをする場面を見かけます。これは他者を意識できていない発達途中では仕方ないことです。順番を守るルールを教えるのは大人の役割です。ルールを知り、本人も快適に過ごせるようにしてあげる必要があります。



最初は「大人から言われたからそうする」ということでいいのです。次第にルールを覚え、トラブルを経験しなくなり快適に過ごせるようになります。次に共感性に基づく判断ができるようになることが重要となってきます。「私が守らないと、他の人はどういう気持ちになるだろうか。」「割り込みしたら、された人はどんな気持ちになるか。」など考えることができ、自分の意思でよりよい選択ができるようになるのです。

ルールを教えることはとても大事なことです。それだけでは、脆いのです。「人を傷つけてはいけない。」「嘘をついてはいけない。」などということは当然わかっています。それでもやってしまうのは、道徳的判断をする能力が低いということであり、共感性の低さと関係があるのです。この共感性ですが、経験値によって変わってきます。例えば、誰かが遊んでいるおもちゃを取り上げて喧嘩になってしまったから、次は一緒に遊ぶようにした。すると、互いに気持ちよかったなど、小さな失敗から学んでいます。この経験値を過保護・過干渉の下で育った子供は、親の考えを聞かされて、本人に考えさせる時間も奪われてしまいます。大切なのは、子供の話を聞き、内省を促すことです。内省が深まらないようなら「〇〇ちゃん(相手)は、どう思ったかな？」などの声掛けができます。

子供の頃に何を体験したかが、その後の人生に長期的な影響を及ぼします。以前は発達心理学といえば子供から青年期までが研究の対象でしたが、現代では生涯を通して発達が続くという生涯発達心理学も注目を浴びています。

高齢化が進んだ社会で、大人になってから「よりよく生きる」ことは重要なテーマです。そのよりよく生きるためのベースは過去の経験、特に子供の頃の経験は重要だと言われています。親はいつまでも子供についていてあげることはできません。子供の頃に親が「転ばぬ先の杖」となって転ばせなければ、転んだ経験のない子供は、自分で何に気を付けたらいいかわからなくなるのです。